

Title	秋草文壺、幻の門
Sub Title	
Author	吉増, 剛造(Yoshimasu, Gozo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.73, (1997. 12) ,p.614- 616
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	安藤伸介, 岩崎春雄両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00730001-0616

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

秋草文壺、幻の門

吉増剛造

“底からぼうと浮び出て来る

大きな瞳の感覚——”*

江戸の海の古底にも妣鯨や

夢の中径で息絶えた子鯨が睡る

“アンドー先生の大きな瞳の感覚——”

が丘の古層、(日吉とはよくつけたものだ、

何かあるな、……………) 淡いオリープの、

柳、蜻蛉、芒の秋草文壺に

ぼうと浮び出て来て

わたくしたちを驚かす

「それは、幽霊にかぎらないぞ」

口中のあまい茨うばらの茨いばら

「底からぼうと浮び出て来る」

武蔵野の幽霊ゆうれい 幻まぼろしの門……

……の、*into-nation*——

わたくしも崖に——手を——掛けて——考えてみる

春に日吉で、アンドー先生に、お逢いさえ

しなければ「こつくりとした味ひ——」***の、言葉の實みを知る

こともなく「花嫁が食卓についている時のように、
だまって恥かしそくに旅を、……」***していたのに

「底からぼうと浮び出て来る

大きな瞳の感覚——」

江戸の海の古底には妣はは鯨くじらや

夢の中ミチ径ぢで息絶えた子鯨こくじらが（門の夢を見つつ）睡る

* 折口信夫「ねくらすよの現實」(昭和二十四年)より。長くなりませんが、「西脇さんにはあ、言ふ特殊な教養を積んだ紳士だから、日本離れをした詩を作ると言ふのが、通念になつてゐる。だが、近年作られる詩は、日本近代文学のらいふいんできすのやうに、又てまのやうになつて来た表面だけの肉感を亡して、其よりも底にある文藝復興期の藝術の品位をより返して来たやうな、美しさが輝き出てゐる。瑠璃の珠の色深さ。口に含んで見たら、かうもあらうかと思ふ——こつくりとした味ひ——、手に乗せれば、底からぼうと浮び出て来る大きな瞳の感覺——そんなものが、純粹の日本語——さうして同時に日本語の持たない別の表現力——そんなものを持つた語でくり出されて来る。」からの引用です。

* 詩稿にむかいつつ、ふと思ひたつて、図書館(日吉)にお訊ねの電話をしていた。しばらくすると、Jaxが作動して、

秋草文壺 一口 東京都 慶応義塾

高さ三八・五 口径一六・七 胴径三七・七

平安時代

この壺は昭和十七年四月、川崎市北加瀬の俗称加瀬山の東南麓で土取り工事中に発見されたものである。出土状況の詳細は不明であるが、中に火葬骨が納められていたといわれる。素地は灰白色の粗糲な半磁質で、器面の大部分は焦げて暗灰褐色になつており、肩に淡いオリーブ色の自然釉が厚くかかり、これが胴に数条流下している。胴から頭部にかけて芒柳、瓜、蜻蛉等を流麗な線で彫りつけてあり、口偏内側に「上」の字が刻してある。器形、文様から藤原時代の遺品とみられ、製作地は愛知県知多郡の常滑窯とみられている。藤原時代、鎌倉時代のものと思われるやきものうちでも、他に類のないすぐれた壺で、わが国陶磁史上もつとも貴重な遺品の一つである。

* * * 安東伸介先生は、日吉のカマボコ校舎で、西脇先生のことと大宰治について語って下さった。その「Info-nation」と雑(まぎ)り方、濃さ、熱度が、わたくしの貧しい脳髓の「瑠璃の珠」のように、記憶の芯となっていました。安東先生は変られない、……。若さ、……。詩の若さ、……を初めから直観していたのかも知れません。

* * * * * 前記、折口信夫。

* * * * * チョーサー「カンタベリ物語」より「学僧の話、冒頭。」どんな英語のひびきが聞こえて来るのでしょうか、それにも耳を澄しておりますた。